中世日前・國懸神宮の本殿

THE MAIN SHRINE OF HINOKUMA-KUNIKAKASU-JINGŪ IN THE MIDDLE AGES

高井 昭*
Akira TAKAI

The purpose of this paper is to present a reconstitution of a building from the 1557 Hinokuma-Kunikakasu-jingū main shrine. The present drawings are based on writings dated 1557, parts of the *Kii-Zoku-Fudoki* and the three drawings from the medieval period.

We have found that the 1557 reconstruction of the main shrine (a width of 7 bay and a depth of 5 bay) is one size larger than the present main shrine (a width of 5 bay and a depth of 3 bay).

Further, from the *Hinokumagū-Nenjū-Shinjiki*, written in 1399, we can infer, for example, the location of the "naigu", the "gyokuden" and the "midan".

We found that the 14th century and 16th century constructions had also many points in common.

Keywords : *Hinokuma-Kunikakasu-jingū shrine, writings dated 1557, Kii-Zoku-Fudoki, Hinokumagū-Nenjū-Shinjiki*

日前・國懸神宮, 『弘治三年記』, 『紀伊統風土記』, 『日前宮年中神事記』

1. はじめに

日前・國懸神宮は, その名が既に『日本書紀』宝鏡開始章に見られる我が国有数の古社である。しかしながら, 現在の本殿は大正期のものであり, それ以前の本殿については必ずしも明らかでない。一方当社に関しては, 中世の年間神事を詳細に記した神事記録(後述)も残っており, これをもとに神事と建築の関わりを考察するためにも, まず本殿の建築形態を可能な限り明確にしておく必要があると考える。

先行研究としては, 福山敏男・井上充夫両博士の論考があり¹⁾, かつての本殿を窺い知る資料として, 絵図や『紀伊統風土記』²⁾(以下『統風土記』)「日前國懸兩大神」の項の記録があげられているが, 今回それらに加えて, 『日前國懸兩宮大雙紙』³⁾(以下『大雙紙』)の中に弘治3年(1557)の年記を持つ本殿の建築に関する記録(表題がないので, 以下『弘治三年記』とする。)の残っていることが分った。そこで, 本稿では既知の資料を再検討しつつ, 『弘治三年記』を中心として当時の本殿の形態を推測することを目的とする。また, 弘治3年以前の本殿に関しても中世の神事記録等をもとにして, 若干の考察を加えることにする。

2. 現本殿とかつての造営

現在の本殿は大正14年(1925)造替の建築で, 同一境内の西側に日前神宮, 東側に國懸神宮の二社が相並ぶ。両本殿とも全く同規模同形式で, 桁行5間, 梁行3間,

図—1 現状平面図(神社所蔵)

本稿は, 平成2年近畿支部研究報告集で発表したものに, 新たな知見を加え大幅に訂正・加筆したものである。

* 京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科 大学院 Graduate Student, Graduate School of Architecture and Design, Kyoto Institute of Technology, M. Eng.

造営・遷宮に関する記録から造営表を作成した(表-1)。『続左丞抄』には「任寛治例以四十三年可為遷宮年限之由。建保四壬六二〇〇〇御教書」とある。必ずしもこの年限が守られた訳ではないが、天安元年(857)から弘治3年(1557)の間、多少の振幅をもって造営・遷宮されていたことが分る⁴⁾。永祿5年(1562)以降、造営年の間隔が短い、「二間四方」などとあるように、寛永4年(1627)徳川頼宣による本格的復興までは、ごく粗末な建物であったと考えられる。

西暦	年号	事柄	出典	備考
857	天安元	遷宮	統左	(統左:『統左丞抄』 竈立:『日前國懸阿大神宮書立』※ 大雙紙:『日前國懸阿宮大雙紙』)
898	昌泰元	遷宮	統左	
935	承平5	遷宮	統左	
973	天延元	遷宮	統左	
1006	寛弘3	遷宮	統左	
1049	永承4	遷宮	統左	『小右記』寛弘2年の条によると、内裏造宮の所充に紀伊国が候補に上がったが、日前國懸宮造宮のため免除されている。
1091	寛治5	遷宮・造宮	統左・竈立	
1138	保延4	遷宮	竈立	『中右記』寛治5年12月7日の条に「今日……撰申日前國懸社造宮日時……」とある。 竈立は『文明十二年の當宮旧記』に遷宮の記録ありとする。
1139	保延5	遷宮	統左	
1164	長寛2	焼亡	百練抄・帝王編年記	
1177	治承元	造宮	竈立	
1181	養和元	遷宮	統左	『玉葉』承安5年(1175)の条に「日前宮正殿角木折落及大破」とある。 『公卿補任』によると紀伊守藤原顯光は、喪中のため造宮の間は下野守に選られた。安元元年(1175)〜寿永2年(1183)治承2年(1178)紀伊国の各荘に社殿の修造が隠せられている。 (『平安道文』3838〜3847)
1222	貞応元	遷宮	統左	10月29日、園造宣保が玉垣内にて射殺される。 4月27日、穰れのため、日前宮の造宮を議す。 『吾妻鏡』嘉貞4年(1238)の条に、造宮の成功を記す。 竈立は『文明年中之當宮旧記』の遷宮記録を引く。 竈立は『當宮旧記』の造宮記録を引く。 竈立は『文明十二年之當宮旧記』の造宮記録を引く。 9月、北朝は日前國懸社の木作始の日時を勘がせしむ。 10月28日、將軍義満は日前國懸社に造宮費を寄進する。
1224	元仁元	遷宮	百練抄	
1225	嘉祿元	遷宮	明月記	
1235	嘉貞元	遷宮	百練抄・統左	
1268	文永5	造宮	竈立	
1295	永仁3	造宮	竈立	竈立は『文明十二年之當宮旧記』の遷宮記録を引く。 9月、北朝は日前國懸社の木作始の日時を勘がせしむ。 10月28日、將軍義満は日前國懸社に造宮費を寄進する。
1344	康永3	造宮?	師守記	
1407	応永14	造宮?	教育御記	
1435	享永7	造宮	竈立	
1480	文明12	造宮	竈立・大雙紙	
1533	天文2	炎上	大雙紙	
1543	天文12	造宮	竈立・大雙紙	
1557	弘治3	造宮	竈立・大雙紙	
1562	永祿5	炎上	竈立・大雙紙	
1562	永祿5	建假殿	竈立	
1572	元永3	假殿造宮	竈立	
1585	天正13	破却	竈立・大雙紙	
1585	天正13	建假殿	竈立・大雙紙	
1587	天正15	假殿造宮	竈立・大雙紙	
1593	文祿2	假殿造宮	竈立・大雙紙	
1598	慶長3	假殿造宮	竈立・大雙紙	
1609	慶長14	假殿造宮	竈立・大雙紙	
1627	寛永4	假殿造宮	竈立・南紀徳川	
1925	天正14	造替	寛永4年以降の詳細は不明。	

NII-Electronic Library Service

図-4 『絵図④』(部分)

図-5 『絵図⑤』(部分)

図-6 『絵図⑥』

- ① 『日前神宮國懸神宮社頭絵図』¹⁰⁾ (『神社古図集』に掲載。以下『絵図④』とする)(図-4)¹¹⁾
- ② 『両宮古代図』¹²⁾ (『紀伊統風土記』に掲載。以下『絵図⑤』とする)(図-5)
- ③ 『日前國懸宮図』¹³⁾ (東京大学文学部本居文庫所蔵。以下『絵図⑥』とする)(図-6)

これらの絵図を見ると、西に日前宮本殿、東に國懸宮本殿が並び、各々南方に寶殿、北方に忌殿と廳(日前宮は本殿の北東、國懸宮は北西)が位置し、それらを瑞垣が囲み、瑞垣の東西に中門を開く。更に、3種の絵図には、中言社・女宮殿・酒殿廳等数多くの建物が見られる。

一方、これらの絵図が、いつごろの様子を表わしているのか、その年代範囲を推測しなければならない。先に考察したように、本殿は永禄5年の炎上を境に規模が縮小されたが、これら3種の絵図に関して本殿の柱間数¹⁴⁾などを見た場合、いずれも縮小される以前つまり永禄炎上以前の状態を表わしたものと考えられ、これを下限と

できる¹⁵⁾。また経蔵や護摩堂という建物が絵図の中に見られ、境内に仏教関係の建物の建てられ始めた年代を上限とできるであろう。『統風土記』は『百鍊抄』の承安5年(1175)6月16日の記事¹⁶⁾を引いて、日前國懸神宮境内に仏教関係の施設が建てられるようになったのは、その頃(承安5年)より少し後のことと推測している。これを採用した場合、上限は12世紀終り頃となる。結局、これらの絵図は、12世紀終りから16世紀中頃の間の或る時期の様子を表わしたものであるということになり、非常に広い範囲限定ではあるが、規模が縮小される以前(永禄炎上以前)の状態を表わしていることは概ね確かと思われる。

次に絵図の信憑性についてはどうであろうか。これらの絵図がどの程度正確に描かれているかは厳密には知り得ない。ただ3種の絵図で共通して考えられることは、本殿は比較的詳細に描かれ、それ以外の建物はその存在を示している程度ではないかということである。応永6年(1399)の奥書を持つ当社の年中神事記録(『神事記①』とする・後述)と3種の絵図を比較するために表を作成した(表-2)。この表によって絵図に描かれている建物・植物等と神事記録中のそれらの語句の多くは一致していることが分り、絵図に描かれている建物の14世紀後半における存在がある程度確認できたと考えられる。

また、これらの絵図の性格・描かれた目的等については、年代が確定していない以上明確には分らない。考えられるのは、或る時期の造営・遷宮を記念して描かれた。あるいは、或る時期の社殿の構造・位置関係・名称を描きとどめておく必要性があったなどである。

ところで、これら3種の絵図の本殿には縁が廻っており、現本殿との注目すべき相違点である。この問題に関しては後に検討するが結局明瞭な解答は得られなかった。

4-2 『統風土記』の記録

既に述べたが、『統風土記』にはその編纂当時の本殿とかつての本殿の2種類の記録があり、永禄炎上以前の本殿を窺い知るのはその後者¹⁷⁾である。しかしながら永禄炎上以前の本殿に関しては、『統風土記』編纂当時既に存在していなかったもので、何らかの資料をもとに書かれたものと思われる。仮に根拠となった資料が先に紹介した3種の絵図と次に述べる『弘治三年記』のみであった場合、これら2者と『統風土記』の記録をここで並列的に記す必然性はないと思われ、2者以外の資料を参考にしていた場合に限り有効性があると考えられる。以下その点に関して少し検討する。

次に述べる『弘治三年記』と『統風土記』の記録を比較した場合、前者は柱の寸法と本数が記されているのに対し、後者は柱間数と柱間寸法が記されている所が最大の相違点である¹⁸⁾。また『統風土記』は本殿以外にも境

内に存在する建物に関して、そのほとんどに正面と側面の柱間数を記している¹⁹⁾。これらの柱間数は3種の絵図²⁰⁾とも一致していないので、絵図を参考にしたとは考えられない。よって『続風土記』の記録は、3種の絵図や『弘治三年記』以外の資料を根拠とした可能性があると思われる。

4-3. 『弘治三年記』

本殿と玉殿（本殿内に存在）に関して『弘治三年記』の全文を以下に記す。（項目末の番号は筆者記す）

社殿

- 一、御玉殿御柱之御事 [1]
 - 一、御柱之御高サ一丈二寸 [2]
 - 一、御長押之高サ八尺二寸 [3]
 - 一、御幣軸之大サ五寸五分厚サ五寸 [4]
 - 一、御幣軸之御間之廣サ横八尺 [5]
 - 一、御幣軸之高サ八尺二寸 [6]
 - 一、御長押之長サ五寸五分厚サ六寸 [7]
 - 一、御ますかたの数御柱一本に七宛 [8]
 - 一、御垂木ノ厚二寸三分 [9]
 - 一、御垂木ノ長二寸六分 [10]
 - 一、御垂木ノ長サ一丈一尺 [11]
 - 一、御上之葺様御あしの違サ三寸つつ御よろいふき [12]
 - 一、こはいは四寸こはい [13]
 - 一、蛙また御おもてニ一まい [14]
 - 一、御殿之外之御柱之御事 [15]
 - 一、御高サ一丈三尺五寸 [16]
 - 一、大サ一尺六寸 [17]
 - 一、ひち木の長サ五尺四寸厚サ八寸廣サ一尺 [18]
 - 一、外之かハ御柱之数出本御拜之御柱共ニ [19]
 - 一、御内之御柱之数十八本大サ二尺三寸 [20]
 - 一、御柱之長サ一丈六尺五寸 [21]
 - 一、御長押之大サ一尺三寸 [22]
 - 一、御垂木数三百冊二本大サしたは四寸二分高サ五寸五分 [23]
 - 一、御垂木ノ長サ一丈七尺五寸 [24]
 - 一、御やねのこはい八寸こはい [25]
 - 一、御箱棟之長サ四丈二尺 [26]
 - 一、御箱棟之高一尺八寸廣サ二尺 [27]
 - 一、かつを木の太サ一尺八寸長サ七尺六寸 [28]
 - 一、御千木之長サ一丈二尺二寸廣サ六寸厚サ三寸 [29]
 - 一、鬼板厚四寸二分あ口たきの廣サ四尺高サ四尺五寸 [30]
 - 一、外之かハの御扉之廣サ三尺四寸 [31]
 - 一、御幣軸之廣サ八寸五分厚サ七寸高サ一丈 [32]
 - 一、すかはらの御幣軸之廣サ六寸厚サ五寸五分高サ五尺二寸廣サ五尺御扉之廣サ一尺七寸厚サ一寸六分高サ四尺五寸 [33]
- 弘治三年丁巳三月吉日
- 一、御玉殿之大サ [34]
 - 一、けた行之長サ一丈二尺八寸 [35]
 - 一、面之廣サ一丈二尺五（六）寸 [36]
 - 一、柱之ふとさ一尺一寸五分 [37]
 - 一、なけしのうつ（ち）のり八尺二寸 [38]
 - 一、扉之廣サ合六尺二寸 [39]
 - 一、内々ちんの廣サ合四尺二寸 [40]
 - 一、板敷之高サ二尺一寸 [41]

- 一、内ちんおくへの廣サ五尺 [42]
 - 一、かつを木の長サ三尺二寸こくち一尺 [43]
 - 一、千木之長サ五尺二寸 [44]
- 弘治三年丁巳三月吉日

[15] から [33] までは本殿に関する記録であり、[1] から [14] までと [34] から [44] までは玉殿に関する記録である。この記録は、桁・梁など当然存在すべき材が欠けており、全ての材を列記したものではない。また、各部材の寸法や数を記すのみでなく、屋根の勾配や長押間の内法寸法なども記されている。

一方、弘治3年に本殿の造営が行われたことは他の記録からも確認できるが、その月日までは分らない。ただ、同年4月8日、藤原木工助重友が造営時の労によって日前宮大工職に補任されているので²¹⁾、『弘治三年記』の末尾に見られる同年3月は造営の完成時あるいはその直後と考えられる。よって、この記録は弘治3年に新たに造営された本殿の記録としてよからう。

その他、当社では大正期の造営の際に、旧礎石が発見されたことが注目に値するが、そのときの詳細な記録が現存しているかどうかは今のところ分らない²²⁾。

5. 弘治3年（1557）造営時の本殿

中世の本殿を窺い知る資料として、3種の絵図、『続風土記』の記録、『弘治三年記』を取り上げたが、ここでは『弘治三年記』を中心として、その当時の本殿と玉殿の復原を試みることにする。但し、すべての材に関して記された記録ではないので不明な点も多々残っており、図示した推定復原案（図-7、図-8）は、いくつか考えられる案のうちの一つである。

まず本殿の平面から考えると、『弘治三年記』は柱の本数しか記されておらず、柱間数は『続風土記』の記録²³⁾（「面七間妻五間」）を参考にした。柱間寸法も『続風土記』の記録（「中間一丈三尺脇間一丈宛」）を採用したが、『弘治三年記』の柱寸法からは十分に考えられる大きさであろう。前後の向拝は『続風土記』の寸法（「前ノ御拜者前一丈脇三丈三尺後ノ御拜者一丈三尺四方」）から正面柱間3間、背面1間とした。これは『弘治三年記』の[19]に外側の柱が向拝柱も含めて30本とあるのに一致する。ただ『続風土記』の記録では、背面向拝柱の梁行方向への出は1丈3尺であるが、正面向拝柱のそれは1丈となる。しかし向拝部分は身舎の化粧垂木に更に打越垂木が掛かると考えた場合、1丈では少し短いように思われ、復原案では正面向拝柱の梁行方向の出も1丈3尺とした。

開口部は前後の中央柱間に一つづつ扉を設けた。窓（菅原御戸）の位置に関しては、『続風土記』に「表大御戸」の「傍」としているが、東側か西側かは記されていない。3種の絵図を見た場合『絵図㉔』・『絵図㉕』は日前宮・

図—7 本殿の推定復原案

図—8 玉殿の推定復原案

國懸宮とも正面扉の西側にあり、『絵図⑥』は日前宮は東側、國懸宮は西側に描かれている。断定はできないが、弘治3年の場合両宮とも西側と想定しておいた²⁴⁾。

本殿内部の柱に関しては、[20]に「御内之御柱数十本」とある。18本の内16本は入側柱で、残りの2本は柱筋のいずれかと考えられる。ただし寛永4年(1627)の復興時に、弘治3年の本殿の側柱が省略され、内部の柱の配置形式は受け継がれて今日に至っていると仮定した場合に限り、2本の柱位置を西側から4本目の柱筋にすることができる(図一7、平面図の白ヌキの柱)。また、室内の間仕切の有無に関しては全く不明であり、板敷か土間であるかも判断できない。方位に関しては現在と同様に、正面扉を南側として大過あるまい。

次に外部展開・立面について考える。長押に関しては[22]に「御長押之大サ一尺三寸」とだけあるが、地長押²⁵⁾と内法長押の2種類とし、内法寸法は扉の幣軸の高さから1丈とした。記録には見られないが、窓の下部に腰貫あるいは腰長押を設けた方がよいと思われ、復原案では腰長押としておいた。側柱の上は、[18]より舟肘木と考えられる。また記録には見られないが、舟肘木上には当然存在すべき桁・梁を設けた。

屋根の形状については、3種の絵図を見ると全て入母屋のように描かれているので、弘治3年当時も入母屋檜皮葺とした²⁶⁾。箱棟の長さに関しては[26]に4丈2尺とある。少し短いように思われるが、特にこの部分が誤記であるとは言えないので、4丈2尺²⁷⁾のまま作図した。堅魚木の本数は『続風土記』を参考にして7本とした。

[24]に「御垂木ノ長サ一丈七尺五寸」とあるが、これは長さから判断して、入側柱から軒先に掛る化粧垂木と推定した。その勾配について記されていないが、入側柱上にも側柱と同様に斗拱や桁・梁が存在すると考えた場合、側柱と入側柱の高さの差は3尺(16.5尺—13.5尺)なので、およそ3寸勾配となる。飛檐垂木については『弘治三年記』には記されていない。これは存在しないのかあるいは存在するが記録上省略されたのかどちらとも判断できない。しかし一軒だとしても軒の出は短いとは言えないし、二軒としても十分可能である。復原案では一軒として作図した。垂木の本数は[23]に「三百卅(卅か)²⁸⁾二本」とあるが、これを[24]の垂木のことで割付けると垂木間隔は芯々で約9寸となる。

向拝の垂木に関しても、身舎の垂木がそのまま延びているのか、打越垂木となるのか分らないが、復原案では打越垂木として作図した。ただし螻羽の出および軒先の出は不明である。向拝柱上の斗拱は身舎と同様に舟肘木を想定したが、その他の斗拱も考えられる。また柱上の頭貫や向拝柱と身舎を繋ぐ虹梁の存在した可能性もある。

ところで、3種の絵図には本殿に縁が廻っているが、『弘治三年記』には縁に関する記述はない。[16]に柱の高さ「一丈三尺五寸」とあるが、これが地長押より上部の寸法であって、それより下にも柱が延びていた場合は

縁の存在した可能性はある。しかし「一丈三尺五寸」が柱の実長を示しているのであれば、縁は存在しなかったか、たとえ存在していたとしても地面もしくは基壇上に直接縁板が敷かれていたことになる。結局のところ地長押より下部に関しては、縁が廻っていたのか、あるいは地面・基壇であったのか『弘治三年記』からは判断できない。

また、『絵図⑨』にのみ本殿南側に階が描かれている。本殿の南北には出入口と向拝²⁹⁾があるので、階の存在した可能性も十分に考えられる。

次に玉殿の平面について検討する。[36]に「面之廣サ一丈二尺五(六)寸」とあるが、その前の[35]が桁行方向の寸法を表わしているので、これは梁行方向のことと考えられる。この場合、梁行方向を「面」としているので扉は梁行方向に取り付くものであろう。更に内部は[42]の「内ちん」と[40]の「内々ちん」(内陣と内々陣)に二分される。[39]の「扉之廣サ合六尺二寸」は玉殿正面の扉のことなので、[40]の「内々ちんの廣サ合四尺二寸」は内陣と内々陣境にも扉の存在したことを示すものであろう。[41]の「板敷之高サ二尺一寸」は、内陣と内々陣の床高の差を示すものであり、少なくとも内々陣は板敷であったことが分る。

最後に玉殿の立面を検討する。[3]に「御長押之高サ八尺二寸」とあるが、これは[6]や[38]の記録から地長押と内法長押間の内法寸法と判断される。また、記録にはないが柱頭には台輪もしくは頭貫の存在を考えた方がよいと思われる、復原案では台輪としておいた。

[8]に「御ますかたの数御柱一本に七宛」とある。これは三斗組とした場合斗の数は大斗も含めて6個となり、連三斗とした場合は8個となりいずれも7個にはならない。復原案では三斗組を想定しておいたがなお検討の余地が残るところである。桁・梁は記されていないが当然存在するものであり、組物のうえに設けた。[14]に「蛙また御おもて二一まい」とあるので正面に蓑股を付したが寸法等は分らない。

屋根は[13]に4寸勾配とあるが、本殿内に存在するため垂木などは野と化粧の区別は必要ないと思われる。形状は切妻としたが、[12]より葺足3寸の板葺ではないかと考えられる。箱棟や鬼板・棟木・破風板なども記されていないが、設けておいた。

本殿の復原を考えたときに寛永4年の復興時に弘治3年の本殿の内部の柱の配置形式が受け継がれて今日に至っていると仮定したが、同様に玉殿の位置も現在の3つの小宮殿³⁰⁾に受け継がれていると仮定した場合に限り、その位置は本殿の西側から2本目と4本目の柱筋の間となり(図-7の点線で囲まれた四角形あたり)、扉は東を向くことになる。この時、屋根の桁行方向は17.7尺未満でないと玉殿は入り切らないことになる。

一方、『続風土記』の記録には「内陣面一丈二尺六寸妻五尺千木鏝木等あり」と記されている。この「内陣」とは、その大きさや千木・堅魚木の存在することから現本殿の内陣のようなものではなく、側壁が本殿から独立した小宮殿のようなもの、つまり『弘治三年記』の玉殿に相当すると考えられる。しかし両者の記録は側面の寸法が一致していない。

6. 弘治3年(1557)以前の本殿

弘治3年以前の史料としては、神事記録と治承2年(1178)の記録がある。いずれも井上博士が言及されているが、補足すべき点もあるのでここで取り上げておく。

6-1 神事記録

中世の神事記録に関しては、管見の限りで5種類確認できた。

- ①『日前宮年中神事記』³¹⁾: 2月と3月の一部を欠く。建徳2年(1371)に記したものを応永6年(1399)に書写したという奥書あり。
- ②『日前宮年中神事記』³²⁾: 1月から9月を欠く。奥書なし。
- ③『日前宮年中神事記』³³⁾: 暦応4年(1341)の奥書あり。
- ④『日前國懸太神宮年中行事』³⁴⁾: 寛文5年(1665)の奥書あり。寛文5年の時点で、それよりも昔の神事を記したもの。
- ⑤『古事類苑』神祇部29の『日前宮神事記』³⁵⁾: 11月と12月を記す。奥書なし。

以上5種類の神事記録は、詳細に見ると多岐にわたる相違が見られるが大部分において内容は一致する。以下の考察においては、5種類の中で質量ともにもっとも充実している①の神事記録(以下『神事記①』)を使用する。『神事記①』は個々の神事を見た場合、平安時代末まで遡れるものを含んでいるが³⁶⁾、全体的に見た場合は、奥書の年代が記すように14世紀後半頃の神事状況を表わしたものと判断される。

『神事記①』の中で、本殿に関連すると思われる「内宮」、「玉殿」、「御壇」の3語に注目し、これらの語句を中心に検討する。

a. 「内宮」

神官³⁷⁾が本殿の「南御戸」あるいは「北御戸」を経て「内宮」へ入る³⁸⁾ことから「内宮」が本殿内部を指していることは明白であり、既に井上博士も指摘されている。この場合『神事記①』の中の「南御戸」「北御戸」などの語句は図-7における南北の出入口に相当すると考えられる。また「菅原御戸」の語句も見られ、位置に関しては「大御戸ノ西ノワキノ小御戸也」との説明があり、これは図-7の南出入口西脇の窓(「菅原御戸」)に相当するものであろう。更に「(南) 荘絹下」という語句も

何度か見られ、惣官をはじめ多くの神官がそこで一拝を行なっている。例えば相嘗祭飭神殿の条³⁹⁾には、

次惣官被参内宮於南莊絹下一拝一拝之後聊敬屈……次於人母座前邊奉向玉殿方一拝敬屈其後着座

とある。本殿内に入り、一番最初に「南莊絹下」で一拝しているところから、形態はよく分らないが本殿内「南御戸」の近くに「莊絹」なるものが存在していたと考えられる⁴⁰⁾。

ただ、「内宮」(本殿内)の床に関しては、板敷か土間であったかは『神事記①』からも分らなかった。

b. 「玉殿」

「内宮」の中に更に「玉殿」が存在する。井上博士は「玉殿」が現本殿の内陣部分を指すのか、あるいは側壁が本殿から独立したものを指すのか判断を控えられている⁴¹⁾。しかし、井上博士も指摘されるように「玉殿南壁下」「玉殿南裏」という語句が見られる以上、少なくとも「玉殿」の南側の壁は本殿から独立していたことを認めざるをえない。相嘗祭の飭神殿と大集祭の条には、

惣官於御戸外蹲居葉薦上……次以御幣奉授惣官……次相見取彼幣伏置玉殿南壁下…(中略)…次祭方相見…於玉殿南裏取御手洗草枕(飭神殿。傍点筆者)

次末座中臈荷田子御酒参内宮【玉殿南裏置之】(大集祭。傍点筆者。【 】は割注を示す。以下同様)

とあり、「玉殿」の南側に御幣が伏置かれたり、御手洗草枕や田子御酒が置かれたりしていることが分る。

玉殿内部には白冠一人だけが入るが、その出入りに際して「玉殿御戸」の開閉が行われており⁴²⁾、「玉殿」にも扉の付いていたことが分る。そして、「玉殿御戸」と本殿の「御戸」の間に更に扉のようなものが存在したことは『神事記①』からは認められないので、現本殿のように扉で区画された内陣の中に更に「玉殿」が存在していたとは考えられない。

ところで、「玉殿」の本殿内での位置と扉(「玉殿御戸」)の向きについては、井上博士は詳しく言及されていないので、ここで検討する。まず「玉殿御戸」の向きについて考えたい。相嘗祭飭神殿の時、惣官をはじめ何人かの神官が本殿内に参入している中、入母が「玉殿御戸」を開き、白冠一人だけが「玉殿」内に入る。そして白冠は東向きに着座し、巫女が御手洗草枕を「玉殿御戸前」に置くとある。この御手洗草枕がいかなるものか不明であるが、その後、土師が本殿「南御戸」の外で盃に御酒を盛って悠紀に渡し、悠紀は盃を両手に一つずつ持ち(左手黒御酒、右手白御酒)、「玉殿」と「南御戸」の間を4往復し計8盃を白冠に進める。このうち最初の右手の御酒と4回目の右手の御酒を白冠は手水として使用したと解釈される。よって巫女が「玉殿御戸前」に置いた御手洗草枕は手水と関係があるものと推測できる⁴³⁾。この場合、白冠は東を向いているので、御手洗草枕の置かれる

「玉殿御戸」は当然東側に開かれるべきであろう。すると「玉殿」の東側壁も南側壁同様に本殿から独立していたことになる。更に、『神事記①』には、1月14日都鎮部祭の時に、何人かの神官が本殿内に入り「両方大御戸脇困邊并玉殿三方菅原御戸脇【各皆両方脇也】各稻二束宛奉備之」(傍点筆者)とある。この「三方」の意味は難解であるが、「玉殿の三方向に稻を供える」と解釈した場合は、少なくとも玉殿の三側面が本殿から独立していたことになる。

次に「玉殿」の本殿内の位置を考える。「玉殿」の側壁のうち東側と南側以外は本殿の側壁を兼ねていたとした場合、本殿内西方しか考えられない。また、東側・南側以外の側壁が本殿から独立していた場合、本殿内の中央・東方・西方の概ね3種が考えられる。仮に中央に位置していた場合、本殿「南御戸」を入った正面の所が「玉殿南壁下・南裏」となる。先にも述べたように、此处は色々なものが置かれる所であり、不都合とせねばなるまい。東方に位置していた場合、これも先に述べたが、悠紀が両手に御酒を持って本殿「南御戸」と「玉殿御戸」の間を何回も往復するのに都合が悪い。結局、本殿内西方がもっとも穏当な位置ということになる。また、「玉殿」の規模については、最低白冠一人が入れる広さが必要となる。

以上の結果『神事記①』の「玉殿」は、形態が全く一致するかどうかは分らないが、『弘治三年記』の「玉殿」に相当すると考えられる。

ところで、図一7では、弘治3年の入側柱の配置形式や玉殿の位置が今日まで受け継がれていたという条件付きで、玉殿の位置・向きを推測したが、それが『神事記①』から推測した玉殿の位置・向きと矛盾していないと言えよう。

c. 「御壇」

「御壇」に関しては、井上博士は言及されておらず、ここで新たに取り上げることにする。

1月16日早旦、御殿鎮の神事において、祭方人母と白冠は本殿内に着座し、火焼が彼らの前に盃や餅を供える。それに続いて、

非祭方人母中臈等者北大御戸前御壇上着座【用葉薦以南為上】盃餅等同備之

とあり、「北御戸」の前に「御壇」の存在したことが分る。この場合「前」とは「北御戸」から本殿外部へ出たすぐのところを指すと考えられる。また、7月15日津万牟幾御祭では、神事の最初に朝座を行ない最後に夕座を行なうが、朝座では「御壇乾角」に神官達が北側と西側に並び座って勸盃・饗膳を行ない、夕座では「御壇良角」に北側と東側に並び座って行なっている。よって「御壇」は少なくとも本殿の北側・東側・西側を廻ると推測される。更に

白冠参御壇上【自東石階…】(1月1日)

今夜祭方土師御壇東面下結竹稻五束奉掛之(相嘗祭大集祭)

とあり、これらも東側に「御壇」の存在したことを示すものであろう。一方、相嘗祭飭神殿のとき惣官は「南御戸」から本殿内に入りし、神事終了後「下自御壇」とあるので南側にも存在していたと思われ、「御壇」は本殿の外部四周を廻っていたものであろう。また、地面から幾らか高い位置にあり石階等によって昇降していたことも分る。但し石階に関する記載は1月1日条のみである。それによると白冠と人母が「東石階」から御壇上に昇り、南御戸もしくは北御戸の前に御供と荷前を進め、奉幣を行って「小石階」⁴⁴⁾より下りたと解釈される。南あるいは北の御戸前に行くのにわざわざ東石階を使用しているので、それ以外の石階は存在しなかったのかもしれない。しかしながら、相嘗祭の時などは、惣官をはじめとして多くの神官が南北の御戸から出入りしているの、南面や北面に石階が存在した可能性もある。

また、『神事記①』の記載からは「御壇」が、縁であるか基壇であるかは判断できない。

以上、応永6年(1399)の奥書を持つ『神事記①』から、その当時の本殿を検討したが、「内宮」(本殿内部)に「玉殿」が存在し、更に南北の出入口、「菅原御戸」という窓の存在することは、弘治3年の本殿と基本的に変りないことが確認できた。ただし本殿内部が、板敷か土間かは判断できない。また、「玉殿」は本殿内の西方に位置し、扉は東を向くと推測した。「御壇」に関しては、本殿の四周を廻り、地面より幾らか高い所に位置するとしたが、具体的に何(縁あるいは基壇)を示すかは分らなかった。『神事記①』によって推測される本殿の概念図を示しておく(図-9)。

図-9 『神事記①』による概念図

6-2 治承2年(1178)の記録

更に以前の史料として、治承2年(1178)の「造日前國懸宮役請文案」がある⁴⁵⁾。この記録によると、本殿を桁行柱間ごとに区切り、各柱間の造営の全体あるいはその一部をいくつかの庄に課したと思われる。断片的であるため、本殿の全体像は把握できないが以下検討する。

(日前宮・國懸宮両本殿は同規模同形式とする)

まず桁行方向に関しては「東第二間」「西端間」「東妻庇」の3語が見られ、3間以上あったことは容易に推測できる。一方、井上博士は「東妻には庇があったが、西妻にはなかったらしい」とされている。これは「東妻庇」に対し「西妻庇」という語句が使われず、「西端間」が使われていることを根拠にされているのかと思われる。しかし「西端間」が庇に相当するのか母屋に相当するのかは、この断片的史料だけでは分らないのではないだろうか。

次に梁行柱間数に関しては、手掛りとなるのは日前宮本殿の東第二間を「一間二面」と記す部分である。この「一間」を桁行方向(東第二間)の柱間数と解釈し、「二面」は母屋の南北に庇の存在したことを示すものであるとした場合、母屋部分の梁行柱間数は不明となり、庇を含めた梁行全体の柱間数は3間以上となる⁴⁶⁾。よって治承2年の記録から分ることは、桁行・梁行とも3間以上ということであろう。また、弘治3年の本殿と比較した場合、側柱と入側柱を有することが共通点となろう(図-10)。

図-10 治承2年の概略図

7. まとめ

以上、3種の絵図と『続風土記』の記録を参考にしながら『弘治三年記』を中心として、その当時(弘治3年)の本殿・玉殿の復原を試みた。

弘治3年以前の史料としては、応永6年(1399)の奥書を持つ『神事記①』を検討した。その結果「内宮」(本殿内部)に「玉殿」が存在し、更に南北に出入口、「菅原御戸」という窓の存在する点は弘治3年の本殿と基本的に変りがないことを確認した。要するに、弘治3年当時の本殿で幾つかの点は14世紀後半に遡ると考えられる。更に以前の史料として、治承2年の記録を取りあげたが、断片的な史料であるため不明な点が多い。弘治3年の本殿とは側柱と入側柱を持つ点が共通しているのではないかとおいた。

なお、『神事記①』については、今回は本殿の建築に関する点のみを部分的に取り上げたにすぎないが、その他重要な意味を含んでいると思われる神事が多く見られるので、神事と建築に関する考察は本稿の結果をふまえて、改めて論ずることにしたい。

また、今回の研究に当たっては日前・國懸神宮の紀俊武宮司に数々の御協力を賜った。心から感謝する次第である。

(本研究は平成4年度財団法人日本科学協会の笹川科学研究助成によって実施したものである。)

注

- 1) 福山敏男：『神社古図集』（昭和17年、日本電報通信社、平成元年に臨川書店より復刻版発行。）
井上充夫：『日本上代建築における空間の研究』15～21頁（昭和36年、私家本）
- 2) 幕府の命を受けた和歌山藩が文化3年（1806）に、藩の儒臣仁井田好古を総裁に命じて編纂させた紀伊国の地誌。天保10年（1839）3月、総裁から192巻が奉呈された。明治43年（1910）に和歌山県神職取締所から5冊の活字本として出版された。平成2年復刻版発行（臨川書店）。
- 3) 江戸時代の初めに、その当時神社が所有していた個々の史料の全文あるいは一部分を列記したもの。数々の事柄を記し、13世紀以降の中世のものが中心である。（東京大学史料編纂所に写本が残る）
- 4) 康永3年（1344）と応永4年（1407）が単なる準備で、実際に造営が行なわれなかったとした場合、この間の造営間隔は約140年となる。
- 5) (『統風土記』編纂当時の本殿)
「日前宮……正殿面五間妻三間檜皮葺千木堅魚木あり中古以来の假殿作なり……國懸宮……日前宮に同じ」
(かつての本殿)
「古代宮造 日前大神宮 堂宮造屋禰者八幡造檜皮葺也、千木【両方】鯉木【七本】、面七間妻五間、中間一丈三尺脇間一丈宛【是を六尺五寸常間にすれば十二間に八間】、表大御戸【二枚】傍菅原御戸【二枚小御戸也】裏大戸【二枚】、前後御拜【前御拜者前一丈脇三丈三尺後御拜者一丈三尺四方】、刻鏤文飾あり、内陣面一丈二尺六寸妻五尺千木鯉木等あり…（省略）…國懸大神宮宮殿内陣……日前宮に同じ」
(【 】は割注を示す。以下同様。)
- 6) 「……文明十二年に上代のこく公家武家ら仰合御造営なさる大宮づくり是なり、……天文二年三月廿三日に炎上す十年の間かり殿なり、同十二年氏子として大宮づくりをいたす……、弘治三年に氏子として又大宮づくりやかて五六年をへて永禄五年二月に炎上、元龜三年に是も氏子として玉殿をたて申大宮づくりかけすして年をへて天正十三年に太閤秀吉公大田の城水攻……同年かり殿を立申【五尺四寸也】、同十五年に……かり殿を立……【二間四方也】、文禄二年に……造営【かり殿三間二間】、慶長三年に氏子としてかり殿造営【四間三間】、同十四年に氏子としてかり殿造営【間同じ】」
- 7) 『統風土記』は、絵図に関しても編纂当時の本殿とかつての本殿の2種類を載せており、これは前者。

- 8) 文化8年（1811）から嘉永4年（1851）の間に計18巻として、刊行された江戸時代の代表的な名所図会。
- 9) 仮に現本殿と形式が異なっていたとしても、「假殿」と呼ばれていた以上、「大宮づくり」と呼ばれていた弘治3年の本殿より小規模であったと思われる。
- 10) 福山博士は、この絵図を中世のものを江戸初期に写したものと推測されている。（福山前掲論文）
- 11) 本来は絵図全体に掲載すべきであるが、紙幅の関係上、既に刊本に掲載されている【絵図④】と次の【絵図⑥】は部分のみとした。
- 12) 管見の限りでは、明治43年の活字本（注2参照）1種とそれ以前の写本6種の計7種が残る。ただ『統風土記』編纂時に掲載されたものは、【絵図④】と同様に（注10参照）、それ以前（中世か）の絵図を写したものかと思われる。
- 13) 本居宣長の系統を継ぐ国学者が、かつて当社が所蔵していた文書の幾つかを写したものが現在東京大学文学部本居文庫に残る。これらは、書写した人物名から、おおよそ幕末から明治の初めの間に写されたものと考えられる。よって【絵図⑥】も、その時期に当社が所蔵していた絵図を写したものである。一方、『統風土記』の編纂に本居内遠（宣長の孫弟子）が携わっていたことや、【絵図⑥】と【絵図⑦】が非常に類似していることから、両者は同じ絵図または祖本を同じくする絵図から写したのではないかと考えられる。

14)

	『絵図④』		『絵図⑤』		『絵図⑥』	
	日前宮	國懸宮	日前宮	國懸宮	日前宮	國懸宮
桁行方向	7間	7間	6間	6間	7間	7間
梁行方向	?	?	4間	4間	5間	4間

- 15) 福山博士も【絵図④】を永禄炎上以前の様を語るものとされている。（福山前掲論文）
- 16) 「蓮華王院惣社鎮坐八幡已下廿一社、其外日前熱田嚴島氣比等社本地御正躰圖繪像、但日前宮熱田御本地無所見仍只被用鏡」
- 17) 注5参照
- 18) また、前者は本殿の堅魚木の寸法を記すが、後者はその本数を記す。
- 19) 例えば「院御所【面五間妻三間】、権現堂【面五間妻四間祈禱所】、舞臺【二間四方田楽猿樂白拍子等】……」
- 20) 絵図に描かれている本殿以外の建物は簡略的であり、柱間数が正確かどうかは疑わしい。
- 21) 『統風土記』巻之三、古文書部第三に所収。
- 22) 『神社古図集』は旧礎石の写真を載せるが、その写真だけでは詳細は分らない。また、日本古典文学大系『日本書記上』（岩波書店、昭和42年）の補注（562頁）には発見された旧礎石から、かつての本殿が正面7間・側面5間であつたらしいとあるが、根拠となった資料が不明瞭である。
- 23) 『統風土記』に関する記録は注5参照。以下も同様。
- 24) 『弘治三年記』の本殿および玉殿の記録に日前宮と國懸宮の区別がないのは両宮とも同規模同形式だからであろう。『統風土記』も【絵図⑥】では窓の位置は異なるが、記録では國懸宮は日前宮に同じとある。
- 25) 縁板が存在していた場合は切目長押となる。以下同様。

- 26) 『続風土記』には「屋禰者八幡造」とあるが、現在いうところの八幡造を指しているとは考えられない。
- 27) 屋根の形状を切妻や寄棟とした場合は、箱棟の長さ4丈2尺という寸法はますます不都合になる。
- 28) 柱間寸法13尺の柱間に入る垂木の本数をA本、柱間寸法10尺のそれをB本、配付垂木の本数C本とした場合、垂木総数の半分は図より $(2A + 10B + 4C)$ 本となりこれは必ず偶数となる。342本の半数は171本で奇数となり不都合が生じるので復原案は332本で作図した。但し、柱間に関係なく垂木が配された場合はその限りではない。

- 29) 但し、3種の絵図には何れも向拝は描かれていない。実際に向拝が存在しなかったのか、存在していたけれども省略されて描かれたのか、どちらも判断できないが、『弘治三年記』より少なくとも弘治3年の時点では、向拝は存在していたと考えられる。
- 30) 本殿はある時期において相殿が祭られるが、その大きさなどから判断して、少なくとも弘治3年時は、玉殿は1つであったと考えられる。
- 31) 東京大学史料編纂所と東京大学文学部本居文庫（注13参照）に写本が残る。
- 32) 注31に同じ。①の神事記録の10・11・12月の部分と比較した場合、記事配列・記述方法・用字・用語など細かい点で相違が見られるが、大部分において同一の内容と表現をもち、同じ系統に属する記録と思われる。
- 33) 注31に同じ。内容的には、この③の神事記録に大幅に補足説明・詳細説明を加えたものが①の神事記録のように思われ、③の神事記録が原本で①はその増補版かと思われる。ただし、双方に共通の原本があり、それを省略的に写したものが③の神事記録で、省略せずに写したものが①である可能性も残る。
- 34) 神宮文庫所蔵。『日本祭礼行事集成』第四卷（昭和46年平凡社）に所収。①の神事記録を要約したような内容である。

- 35) 井上博士の前掲論文は、この史料を参考にしている。『古事類苑』のこの部分は神事記録②の11月と12月の部分を活字化したものとも考えられるが、若干の相違が見られ即断は避けておく。
- 36) 例えば『神事記①』には「(五月下旬吉日) 御田植御祭……【文治二年五月国造宣俊被始之】」とあり、御田植祭が文治2年(1182)から始められていたことが分る。
- 37) 神宮に関しては、『書立』（表一に注記あり）に「日前宮古代神官之事」と題して以下のように記す。但し、これらの神官の頂点に惣官（国造）が位置する。
- 白冠二人 人母二人 行事二人
以上称六神官社人之上臈也
相見二人 大内人二人 火焼二人
権内人二人 大案主六人
以上称中臈也
酒殿守一人 土師二人 御琴引二人
案主二十五人 内人六人
以上称下臈也右社人也（以下省略）
- 38) 神官が本殿内に入るのは、1月14日～16日と相嘗祭（日前宮は11月の4日間、國懸宮は12月の4日間）。
- 39) 相嘗祭に関しては、井上博士が前掲論文において的確にまとめられているので、それを参考されたし。
- 40) 『民経記』によると、天福元年(1233)正月12日に本殿内に盗人が入り「莊絹」が盗まれたとある。
- 41) この問題に関しては「後考をまつことにする」とされている。（井上前掲論文）
- 42) 「人母於玉殿御前一拝祈念之後奉開玉殿御戸」（相嘗祭飭神殿の条）
- 43) 桶・甕あるいは手拭のようなものかも知れない。
- 44) 「小」は「北」の誤写とも考えられる。
- 45) 『平安遺文』3838～3847と『続左丞抄』に残る。
「謹請川上御庄所課造日前國懸兩社殿舎修造請文事所課七尺【東第二間内】
日前宮神殿一間二面内【付壇礎石】……」
「謹請 造日前國懸宮殿舎相樂南部所課事
合
相樂御庄 國懸宮神殿西端間内參尺【付壇礎石】
南部御庄 日前宮神殿東妻庇【付壇礎石】……」
- 46) 井上博士は3間とされている。（井上前掲論文）

(1992年10月6日原稿受理, 1993年3月15日採用決定)